

1925年 (大正14年) [21歳]

「辰雄日誌1925」No. 6 (1)

— 1925年1月1～31日 —

小池辰雄

「汝らの信仰の^{ためし}験は^く壊つる金の火にためさるるよりも貴し」(ペテロ前1・7)

○1925年1月1日 (木)

晴、曇、細雨。丑年。6時少し前、「目覚めよ吾が霊、心はげみ」の歌を唱う。目覚時計で眼が覚めた。母上様と共に6時10分過ぎに家を出た。朝靄が深くたちこめて、未だ薄明である。マントも着ずに出た。すこし寒かったが、我慢した。平口様が乗つて来られた電車を待つて乗った。電車は矢の様に走った。水道橋はすぐ来た。○○町行きに乗り換えた。教会へ着いたときは丁度7時だった。数名の人が来ているばかり。7時すこし過ぎに、早天の礼拝が始まった。讃美歌249「主よみもとに」を歌い、ピリピ書第3章の朗読あり、讃美歌273を歌い、富永先生の講演、祈祷あり。会員の祈祷あり。讃美歌53を歌い、礼拝終る。

1925年の第一日の第一に、神を拝し、神に祈り、神のことを思う。去年を忘れ、新年の希望を神に祈り奉る。まことにまず感謝のことであつた。

帰宅、友達のお仲間と云うわけで、心ならざりしがトランプをする。斎藤様で遊ぶ。キャッチボールをする。四郎ちゃんが来る。年始まわりを簡単にやる。年賀状、止むを得ざるを4通かく。くたびれた。早く就床す。

今年の願いと希望。

第一に、神のこと、基督のこと。全能の神の紳士にして基督、罪の贖主の僕の生活をなすこと。旧約、新約聖書を完全に読了すべきこと。新約聖書を英、独聖書にて読了すべきこと。

第二に、強健なる身体を鍛え上げること。朝の冷水摩擦、起床、就床の時間を厳守すべきこと。食事を規則正しく、且つ適度になすべきこと。間食をなるべくせず、食のことは之を念頭より去らしむること。適度の運動を毎日なすべきこと。よく学び、よく遊ぶべきこと。何を衣、何を食わんと思ひ煩う勿れ。

第三に、語学の勉強に励むこと。独逸語の力をうんとつけること。日々、一定量の読書。

英語の力も相当つけること。日々一定量の読書。

第四に、宗教書を読むこと。

英詩、『聖書之研究』、『旧約と新約』、その他、多々あり。到底、小説や雑誌を読む余裕あ



らず。これ勿論吾が好むことにあらず。

第一と第四とは、我が霊の糧なり、生命なり。

第二は、石炭なり、原動力なり。

第三は、我が務なり。

「我らは神の中に生き動きまた在るなり」(使徒17・28)

日々の歩みを牛の如く、堅実に、急がず休まずに。而してまた、果斷、敏捷を尊ぶ。

1924年の柏木に於けるクリスマススを憶えよ。

1925年は、神の子たる辰雄たれ。

益々、神のため、基督のため、同胞のため。母上を思い、兄上を偲べ。

選ばれたる者、辰雄よ、使命は大なり、路は遠し。十字架によりて立てよ。

○1925年1月2日(金)

晴。朝一寸、斎藤さんへ上る。フットボールの仕合を附属へ見に行く。浦高対水高。5対0で大勝。実力に於て完全に相異あり。震災後初めて附属へ行った。大分様子が変わっていた。尾田先生に御年始に参上する。廣瀬に会う。彼は毛をわけている。変な帽子をかぶっている。外も内も昔と変わっている様だ。大分友達にあった。真砂町の本屋で『続天路歷程』を買った。ヘブライ語の文法書があった。これが読める様になるとステキだなと思った。青木へ御年賀に行った。トランプ等をした。9時半、宣ちゃんとおいとまして来た。今日は勉強のしぞめをしたが、色々のことであまり出来なかったのは残念であった。所謂お正月気分で遊ぶのはこの頃いやになった。

○1925年1月3日(土)

晴。今日はやはりフットボールの仕合を見に行く。敵は八高、強敵。やや、のまれた感あり。3点、前半戦で入れられたのは、実に痛手であった。後半、奮戦の効空しく結局3対0で負け。やはり実力に相異あり。

それからお墓詣に行く。兄上と親しくお話した。兄上は1925年、僕のために祈り、救け、励まし、教え、導き給うことを約し給うた。僕は感謝に溢れてお墓を辞した。彼の墓碑に「從七位」とあるは如何に見ても兄上の好み給うものでなかった。そこに土を塗りこんで上げたかった。人々は知らず、これかえって兄上のためなりと。僕は「從七位」のかわりに「聖徒」、然らざれば「神の人」「神の子」「神に酔える人」「全能の神の紳士」「基督の僕」等と冠して上げたいのである。兄上自身はただ小池政美と書かれたかったにちがいない。然れども彼の臨終を思い見よ。それは何と希望に満てる、うるわしき、感謝なる、讚美なる死であったことよ。死に勝てりとはこのこと。死を通過して天国へとはこのことである。詩人ブレークの如く神秘的のところもある。



「基督イエス様が迎えに来ていらつしやる。アソコニ、アソコニ」

と目撃された兄上を考え見よ。彼、神に酔える人に非ずして何者ぞ。

「母上様、おゆるし下さい」

と云つて先だたれた。天国へ、率先して!!! 従うものは我々であらねばならぬ。

見よ、親戚の者よ、君達もいつかは十字架の死の力を見ることがあろう。ただそれのみぞ待つ。武田の叔母様よ、母上とまで申し上げたき叔母様よ、願わくは共に共に。

僕に3人の敬愛する女性が居られる。一人は母上様である。

一人は去年の8月召された高島の伯母様である。お目にかかつてお話ししたことは数回、お手紙も数通。しかしてお別れした伯母様であるが、実に僕のために祈り、そして僕の信仰に入れるを感謝し下され、且つ益々僕のために兄上(北京)のあとを歩まれるようにと祈つて下さった伯母様なのである。そして今着ているセーターは手づから編まれたお形見である。僕の身体をおもわれて。ああ、僕もまたあの伯母様の様に浄く。

それから、一人は武田の叔母様である。僕のために心から思つて下さる叔母様である。叔母様の片腕であつた北京の兄は亡くなった。その換わりなるべきは僕なのである。そして叔母様もそう言われて、僕の手を握られたことのおぼえている。而して僕はなかなか彼の如くでない。叔母様に対しても申し訳ない。しかし、お助けして共に天国への歩みを歩みたいものである。

1925年は何と重大な年であらう。1922年の暮の頃から芽を生い出して1923年の春には完全に萌え出た種は、種々の経験を経て今日に至つた。それは誠に愚かしき経験であつたが、見すてられざりしによりやはり感謝の月日であつた。

吾妻のお墓も御詣りした。震災に非業の死を遂げられた伯父様と正勝さんの霊を弔つた。伯父様は実に親切な方であつた。母上の我が父を亡くされたあとで親切にしてくださつたのは伯父様であつた。

青木の家へ行つた。叔父様に指の膿んだところを切つていただいた。かなり痛かつたが昔の様に泣かなかつた。これでも臆病者がよほど強くなつたと思つた。尤も、もう泣けた年ではないが。はやく来てよかつたと云われた。もう少し日がたつと手全体がはれ上がることであつた。“A Stich in time saves nine.”(時を得た一針は九針を省く(今日の一針、明日の九針))と思つた。泰ちゃんと羽根をついて遊んだ。4時半ごろ武田へ行つた。

宣ちゃんのお誕生日である。お汁粉であつたが、もはや、昔の様に食べる勇氣はなく、また今の僕として節すべきであつた。28日以来、毎日お餅を食べない日はないので、やや、まいつていたので。しかし3杯は食べた。面白く9時すぎまで、笑つたり話したりした。四郎ちゃん、母上3人で帰ってくる。星がすてきである。月も七日位のが中天に冴えていた。



○1925年1月4日 (日)

晴。実によく晴れる。そして比較的暖かい。終日、家に居るつもりであつたが、一寸、運動をとりたくて出掛けた。“William Blake”「ウィリアム・ブレイク」の詩集を買った。1925年の希望と祈願とのために。彼もまた神秘的宗教詩人である。我が友である、良き書である、永遠の友である。これで書架に並べる詩人11人である。この頃、過去を偲びて多感であるが結局は感謝のみである。それはただ十字架の福音これのみによつてである。さらば書くをやめん。

1925年、希望の年のためにのみ祈らん、励まん。

You must be “Be” Christian. “Walk with Christ.”

「汝は基督者で言う “在る” でなければならぬ。基督と共に歩め」。

今日「クリストの幼き画像」と「吹雪中の羊と牧者」「天使と讚美歌」の3図を地球堂で買って来た。

すべてが汝の愚と不信より来る。汝よ、新しき生命の泉によりてのみ生きよ。

○1925年1月5日 (月)

晴。感ずることあり。万事に余裕をあらしめよ。急迫してことをなすな。毎日、少しずつ、堅実に積み上げよ。

親類新年会とかを神楽坂の田原屋でやった。会するもの、青木から5人、武田から3人、家から母、兄、僕。僕はこの会をよしと見ない。神がよしと見給わざるが故に。そこに如何なる意味存するや。現代のうかれたる人々と流を同じうして、御馳走を食べたり、酒をのんだり、バカな空な虚栄なことを語りあつたりして現世の快樂に酔う。ああ、何たる亡びの業よ。その食前にあたつて祈るものは僕一人。何のために祈りしか。みだれざらんため。而して如何せん、酒杯をとるものを。ただ武田の叔母様と並んで戴いたことは幸であつた。

「迎へらる可き者の我が家族、我が親類に我一人なるぬを祈りて。1918.2.11 政美」

之を読んだ僕は、どうして涙を浮かべないで居られようか。新約聖書の第1頁に書いてあつた。

今日は宇都宮から荷物が到着した。約20個である。午後はそれを解いて整理するお手伝をした。奥の六畳が立派に書斎になったと云つて兄が喜んで居られた。リンカーンの額をかけてあげた。亡兄が実にいい写真だと云われたものである。お茶の間には「母の愛と子の親を慕うところをあらわした」画をかけた。室もひきたち、共にふさわしい額である。

荷物をほどこしているとき上の新約聖書が出てきて、ひらいて見て発見したことである。1918年と云えば大学3年のときである。同心町に居たとき。如何に苦しき祈りを捧げられしことよ。天の兄上よ、歓び給え、辰雄ここに在り。当時、兄上は孤独なりき。四面



之皆敵なりき。兄の眼より見て、あわれむべき者どものみなりき。而してよく兄上は耐え忍び給い、愛の行を以て我々に接して居られき。次第にその生命の泉はしみ込み来たりて、遂に我々をも導き給えり。偉なるかな基督者の愛、血。ああ涙なり、感謝の涙なり。兄上よ、さらにさらに導き給え。深刻なる政美兄上の心は未だ僕に明らかにわからぬのであろう。深く深くその深刻さと、その清浄さとをくましめ給え。而して兄上の如く、歩ましめ給え。政美と龍二と辰雄は一体なるものなり。ことに我は使命大なりと感ず。1月5日夜。

○1925年1月6日(火)

晴。朝少し曇ってきた。今朝、斎藤さんでは、湯河原へ静養に行かれた。平口さん、渡辺さんの御紹介で今朝、天文台へ星を見に行くことになった。なかなか得られぬ機会で実に有難い次第である。神楽坂へ額ぶちを買いに行つた。かなりいいのがあったので3円を奮発して買った。早速、兄上の書斎へかけて上げた。

武田の叔母様、青木の叔母様、千鶴代様、隆一さん、来られ、お饗居をする。おすし。武田の叔母と青木の叔母、それは僕に苦しき対称を見させる。

青木の叔母の心よ、さもしからざらんことを、願わくは、虚構と技巧とを去りて清き愛の心にかえれよ。ああ、その日の帰るは何時ぞや、何秋ぞや。自己の子等にのみする偏愛は汝の心をつまづかす根本をなすものなり。汝の心はそれで真に楽しきや。いつか悲しむべき秋は来るのではないか。僕は青木の叔母様のこの心のためにいたく悲しむものである。叔母様を清き人とせんために、切に祈る。故に、またその心のために強くにくむ。僕もこれより後は叔母様をも感ぜしむる人となつて、基督者の行を以て、叔母様を動かしたいものである。然れども動かさんと努力して動かず、眼を十字架に向けて歩むうちに、神、彼女を動かし給う。叔母様をにくむはにくむためにあらず、熱愛のためである。

武田の叔母様にあつては如何に、かかる方は世に稀なりとなす。健全なる思想、健全なる愛の心、実に敬愛する僕の叔母様である。今日も寸時であつたが、お話すると、もう二人の心はピッタリ合致して、熱愛が交えられ、涙さえ眼に浮かんでくるのである。志すかたは学業の優秀に非ず、社会上の地位に非ず、財産に非ず。心なり、心の幸なり、宗教なり、基督教なり、基督なり。叔母様の求めらる、願わくは、その麗わしの御心に、もゆる如き信仰の植えられんことを。

4時半ごろ帰らる。僕は兄上の帰宅を待つ。5時20分前ごろ帰らる。今日は陸軍大学登校最初の日。兄上、第一語学、支那語の由。支那に縁がある。長兄は支那に行かれた。而してまた、次兄は支那語。また支那巡回位はさせられるときが来るかも知れぬ。しなければならぬため、東洋人のため何か、という神のおぼしめしかしら。これは余り大きく考えたかも知れぬが。

さて、5時一寸前に家を出て、吉祥寺のさきなる武蔵境の天文台へ星を見に出掛けた。か



なり電車の中も長い。天候が気づかわれて時々空をみた。中野のりかえ。やつとつく。さて、初めての道、30町〔約3km〕あると云う。行人殆ど全くなし。たまに来たかと思うと自転車ですーッと通りすぎてしまつて、あとはまた孤影トボトボ。月のあかりで道が見えて有難かつた。寂寞、イットセルフ〔そのもの〕である。森があちこちに黒いかたまりをなしている。寒風が面を涼める。今日から寒の入りと聞いてなおさら寒く思う。畠の中に行く。たまに農家に出遭うが、明りが見えるだけで、人は出て来ない。ちよつと物すごい様な、気味のわるい様な気のするところもある。30町は実に長かつた。しかし、星を見たいの一心でがんばつた。こんな、しかし、静かな夜道を今まで歩いたためしがない。月がなければとても歩けまい。無線電信柱では灯火がともされ、なにか作業中であつた。

行くと今日は、新年宴会という様なわけで、一棟に天文台中の人が集つて、何やら愉快そうに遊んでいる。拍手の音や笑声が寂寞の四囲を破つてきこえて来る。ときならぬ、否、ところならぬ歡樂境をなしている。水野良平様をお訪ねする。やはりそこに居られたが、僕の訪ねて来たのをよろこんで迎えて下さつた。27回の卒業生先輩である。彼の顔を見て「ああ、あの人か」と昔を思つた。彼もまた僕の顔を見て「ああ、あの人か」と思つたと、あとでの二人の話しに、彼は云われた。はじめて昔の附中時代をおたがいに思い浮かべたのであつた。数学の天才、水野さんは天文台へ来られて、今、時間の方のことを主としてなされている。日本の標準時は水野さんによつて測定されているわけである。これまた実に国家に対して直接の仕事であり、また実に俗ばなれた、清き天職である。宇宙の天体を相手の生活である。なんと大きな仕事ではないか。彼の風采、話しぶりは、俗化を脱している。僕には、その天職の少なくとも第3位をくだらざるものなることを感ぜしめた。色々聞いてみると、しかしなかなか、計算は面倒なものであるらしい。数学の最高等のものを用うる彼の頭脳もうらやましかつた。標準時計を見せていただく。驚くばかり、スゴイもんだ。その正確なギザミのすんだ音には己れの心も、ピチンとさせられる様であつた。標準時に合わせた、僕の腕時計を。それから、標準時観測の機械も見た。印字機もを見せていただいた。それから望遠鏡台へ行つた。かねてより写真で見ていた、円い塔へ来た。月夜に、大きな釜を原の上へ倒に据えた様である。水野さんと二人切り、トントントンと石段を上つて小さな扉を鍵で開けた。スイッチをひねる。パツと中が光る。雀が2羽、驚いてパタパタ舞い出した。例の、鰐口のような感じのする口が天井に開かれる。齒車によつて天井が回転される。先ずオリオン星座が鰐口に現われる。オリオン星座の無定形星雲を見る。ヤッ！ 実に素敵だ。生まれて、こんな大きな望遠鏡で見るのは初めてである(8時)。肉眼で見えない星が、それこそは、ワンサと現われている。宇宙の奥は深い深い。宇宙は不思議と云うものから出来ている。星雲が見えた見えた。実にそのときの愉快さ、かねてから見たい見たいと思つていた。オリオンの星座が見えた見えた。大きい兄さんからオリオン座に有名な星雲のあることを窺っていたが、今日、今晚それを目撃し得たのである。我々の信仰し、待ちのぞ



む天国は、今日のこの飲み以上に飲ばしいものであろう。その時来らば！ 次に見たのが月である。何とまた、驚いたことよ。素敵なことよ。ティーホー火山とコペルニクス火山とピレネー山脈とを見た。まるで月の世界へ行つた様である。こんなうれしいことはなかった。水野さんに多謝して帰った。

水野さんは基督者である。そして、聞けば天文台には基督者が大分居られるとのこと。いよいよこの天文台村の清さのために飲み感謝であつた。それからまた、音にきく火星を見た。とにかく球形に見えた。本当に火の球である。例の道をすたこら帰り、電車に乗り、帰宅したのが10時10分すぎ。足も相当くたびれた。入浴、色々のお話をして、ねた。

○1925年1月7日(水)

曇後雨。起床9時。炬燵にあたりながら考えた。水戸へ行きたくなくなった。母上にその由を申上げた。一つに、1925年のため祈りたく、計画したきため。一つに、少々勉強したきため。母上赦さる。早速支度して12時40分の汽車で帰るべく出掛けた。リュックサックに一杯本をつめて。車中、『若きルーテル』と『イソップ』(独逸語)をすこし読んだ。

如何なるとき、いかなる処にても、困しめる人を思えば贅沢は云えぬものである。世のあわれむべき人、傲慢なる人のために祈る心の出づるぞうれしき。この二つは汽車の中の所見によつて感じたところであつた。

愚かにして鈍なるものよ、汝の罪はいとも深し、量りがたし。再びその愚を繰り返すことなかれ。1925年は光と栄とを以て汝を待つ。過去を一切抛擲し、忘却して新しき希望の年の計をなせ。確かな一步一步をふみしめよ。帰寮、勿論、誰も居らず。独り、祈ること切なり。水野さん、to my Home、武田の叔母様へ音信を書く。消灯1時。

○1925年1月8日(木)

晴。起床10時。朝昼一緒。村上先生のお宅へ行く。帰寮、ややあつて窪島さんへ行く。一郎さんとかいう人の偉大なる体軀に驚嘆。しかれども彼もとは細く、身長5尺7寸5分(約174cm)にして体重13貫(48.75kg)なりきと。それが今は19貫(71.25kg)余、身長6尺(約182cm)に垂んとす。実に偉大なる体軀として彼の如きはない。しかしその節制を重んずるまた敬服せり。ミカン一つ、胃にわろしとて食わず。食のことをたずぬれば、粗食を以て最良薬となす。飯と味噌汁と漬物にて十分なりと。あんのものは殆どとらずと。我もまた偉大なる身体を得んため、先ず胃腸の強健法として、粗食と節食をなさざるべからず。これに運動と、のんびりした心とを以てすれば、健康うたがいなし。なんぞ薬石を用いんや。人体はもと、それ自身健全となるべき機能を有す。神の御手に信頼し奉り、受くべきものを受け、自ら考えてあれこれとなさざるを以て最善となす。夜、また一人、計画と勉強をなす。消灯10時半。



○1925年1月9日 (金)

晴後雨。起床9時半。昨夜は鼻がつまって寝られなくてこまった。時々そのため眼がさめ熟睡できず、今日は少々頭がぼけている。学校に一寸行ってみた。明日から第3学期。新渡部先生の国際連盟に関する講演が午後1時半から公会堂であるという掲示を1時50分に見る。残念だった。富山茂にあう。水戸に於ける我が知る一基督者。帰寮、相変わらず独り。夜に至り雨降る。

ローマ書7、8章を音読して十字架の福音の有難さに涙ぐんだ。讃美歌を歌った。最後は聖戦の進軍の歌である。主によりてかくも力づけられるかと、己れ独りで不思議に思った。ルーテルが机上に居る。彼と沈黙のうちに語る。『永遠の希望』を半分読む。勉強も少しした。10時半消灯。

神よ、我はおそるべき病を知る。神よ、その病に罹らざらしめ給え。神よ、神の与え給う自然の糧に従いて度を越すことなく、むしろ節量に我は食わん。然らば神はこの病より我を救い給わん。生まれしめ給わん。我信ず、故に我その道を歩まん。アーメン。

身体の健、不健は神に在り。我は我が与えらるるままになし、食のことを思い煩うことなく、己が務めに励まんのみ。太るも太らざるも、伸びんも伸びざるも、神の聖旨のままに。我は神の自然の僕、曲がらざる直き僕、辰雄にてありなん。アーメン。

○1925年1月10日 (土)

雪。昨夜、戸を閉じに玄関に行つて帰るさ、落ちていた何ものかに足がとまった。拾い上げると、それは『聖書の研究』であった。九段の向山堂からである。10時半、寝るつもりであつたが、之を見ては読まずには居られず、11時すこしすぎまで読んだ。相変わらず、生命に溢れた書である。はるかに内村先生と彼等に感謝した。先生と彼等じゃあない。それを通して、イエス・キリストにである。巻頭の辞である「何人をも真似ず」はまた僕自身の言でもあらねばならぬ。

「私は日に日に彼の特訓か指導に与らんとて彼の聖顔を仰ぎまつる。彼が私の為に特別に繋開き給ひし途に私をして歩ましめ給わんとて、私を導き給う其の聖手に私はすがりまつる。私は単独である。然し単独でない。神が私と偕に歩んで下さるからである。」

書を読むに当たつて、その内容を、世の状態、現象、自己の体験に徴して見るときに、よくその内容を知ることを得、また、自己によく消化されて霊の糧となるのである。

今朝は初雪に目も心もパツと開いた。雨の音を耳にしてねて、雪の光に起きる、何たる面白き変化ぞ。登校、出欠席をとるのみ、相変わらず無意義のしぞめを学校はやっている。吉原、平口様、家へ音信をする。今朝は、元旦以来の早起きであつた。人は、いつ、いかなるところでも心の緊張弛緩如何であると思つた。新年を迎うるに当たつて、やはり内村



先生と声を合わせて、

「我等に希望はあるが計画はない。自分は全部之を主に御引渡し申し、彼の御心の儘に動かんとする。故に安心である。怖い人も物もない。我が敵は主が破つて下さる。我が障害は主が除いて下さる。全能の主が我が弱き信仰に応じ、其の聖霊を以て我が衷に下り給う。戦闘は彼に在りて全勝利である。神は生きて働き給う。

栄光神に在れ」

である。

窪島さんへ遊びに行く。お汁粉の御馳走になる。夜、相変わらず宗教書に。感謝。

○1925年1月11日(日)

晴。汝の舌をして、汝の眼をして、慾に迷うこと勿らしめよ。彼等は、町を彷徨す。彼等はこの世の、人の、慾を、楽しみを求めあるく。悪しきものの類に入りて身を墮すことなかれ。私は高等学校生徒なるものを嫌う、嘆く、あわれむ。私は高校生にて高校生にあらず。我、或は大学生とならん。また、役人か、教師か、何になるかを知らざれど、我は常にこの世のものに属けるものに非ざるが故に、それらの名を冠せられて、こころよきものに非ず。また、その名の奴隷とは決してなるまじきものなり。我は飽くまで基督者なり。神の子、神の僕なり。無名の子なり。聖国の一員となるべき子なり。

『永遠の希望』を読了す。全巻これ感謝にして読みとおす。然り！然り！なりき。而して新しき生命を注ぎこまれたることを深く先生に感謝す。先生の全力、全生命が傾注しあるを覚え、実に生命あふれ、実に「永遠の希望」に溢れたる書なり。

誠に誠に、先生と長兄（今は天にその日を待つ）と共に再臨の日のみぞ待つ。而して、現世の生涯は、信、望、愛の、その日その日ぐらしにてあらねばならぬ。何たる恩恵の安息日なりしよ。我、書を読まんと欲するときに、この世ものらは外にガヤガヤと出で行く。ここにじっくりとお導きにあずかり得たことも感謝なり。栄光、神に在れ。アーメン。

基督の十字架を信じ、再臨を信じて決して誤りはないのである。心を確うせよ、基督の僕よ。我もまた福音を恥とせず、1924年の柏木のクリスマスを思い出せよ、我を忘れて福音のために、信望愛の生活のもとに。アーメン。

○1925年1月12日(月)

晴。何事も適度に。余裕をして常にあらしめよ。これ、いざと云うときの蓄なり。用うるを惜しむわけにあらず、常によく仕えんためにして、またこれかえって能率のあがることなり。遊びすぎるなかれ。食いすぎるなかれ、勉強しすぎるなかれ。コントロールある生活をなせ。一步余裕あらしめよ。常にかかることに心を用いたくはないが、ややもすると、一事にこりすぎる性あるにより、己が性癖に一注意を促すのみ。



友と交わる。彼の短所を見て、彼を嫌厭^{けんえん}するなかれ。彼、いかにつまらなく、くだらなく見ゆるとも、彼にもまた長所は必ずあり、その長所を見て、これを取り、その長所と交われよ。然らばその長所はまた、己れのものともならん。而して汝の人たることは次第に築き上げられん。近藤よりその無頓着の長所をとらん。杉浦よりその優しきの長所をとらん。宣ちゃんよりその節度とやや落着あるところの長所をとらん。人と交わる、またよきことなり。

武田の女中、ひでが基督教を求めて、心の平安を得んと願っている。彼女に最近、角筈パンフレット数冊と、先生の書2、3冊、合わせて10冊の書を2回に分けて、かしてやった。小学卒業程度と云うので書に困る。しかし、かかる平易なる書がかえってよいかと思う。願う、彼女の本当の信仰に入らんことを。

武田の叔母様からは感謝と歓喜の御手紙を戴いた。僕も嬉し涙であつた。僕の本当に有難く思つて受けた手紙は、高島の伯母様からのと、母上からのと、武田の叔母様からのと、この三つである。これをのぞいて外にない。この三人の敬する、愛する方々を有するは幸なる哉である。一つの星は天に輝き、二つの花は共に在り。

現代人よ、己れをよしとするものよ、己れの智を大なりとするものよ、種々のものを求むるものよ。汝等の目には到底、神は見得ざるなり。到底、崇敬の念は起こらざるなり。禍なる哉、現代人よ。汝らのためになげく。汝等はこのみて地獄へ陥^{おちい}らんとするか、亡びの子等よ。ああ。

「キリストの福音は毎日克^よく忠実に其職務に励む者のみ之を解する事が出来る。理想の人、読書の人、芸術の人には、十字架の福音は到底解らない。まして、享樂の人に於ては到底。」

内村鑑三先生の言われるとおり。人々が神を離れ、きたない人間の力と愛と智とによつて生活しているのを見ますごとに、私はいよいよ、父なる御神にすがりて歩みたくなるのであります。どうぞ主よ、願わくはいつまでも御許を離れることなく歩ましめ給え。人生はいと真面目なる、神聖なる、純なる、喜びなるものであります。これをけがすは、人々であります。神の聖旨は決してそんなものではありません。神様は、それをよろこび給わないのであります。神よ、願わくは、神の子として。アーメン。

7日に水戸へ来たりしは、我にとりてよきことなりき。神の示し給う英断は此の如しと感謝した。我が祈り、我が希望のためによき時を有したりき。

汝の胃腸を強健にすること、之^{ゆるが}忽^{ゆるが}せにすべからざることを憶えよ。

聖書と宗教書は汝の糧^{かて}、生命^{いのち}の生命なることを憶えよ。

○1925年1月13日 (火)

晴。寒い。実に寒くなつた。夜、窪島へ宣ちゃんと行く。1時間位で帰るつもりであつたが、



どうしてもひっぱり、また話がきれなくなり、また一郎さんという痛快な人物あらわれ、東京の初見物の珍談など、抱腹絶倒、笑止千万なことを云うので、時をも忘れ、10時まで遊んだ。試験前の最後の遊びをした。少々不本意であり、あとであんまり気持ちがよくもなかったが、すんだことはと思つて、そのまま床に入った。お餅をアベカワで6、ノリモチで6、いただいたにはさすがにまいった。窪島さんは進めて進めてしようがない。あの進め(誘惑)に対して、断然拒絶するのは、よっぽどお腹がいいときでなければだめだ。すこしでも遠慮の気味がこつちに見えるともう承知しない。

○1925年1月14日 (水)

晴。寒風ふきすさぶ。人の心、うつりかわるに、現代人のたのみなきを感じることにあり。昨夜は、非常によい夢を見た。

「政美兄上と共にさまざまのことをなした。彼は昔の如く、元気で居られる。しっかりと居られる。」そして、武田の叔母様も居られた。母上も居られた。そして、兄上の云われるよう、

『辰雄も信仰に入つてこんなになりましたよ』

と。母上、武田の叔母に言われたのを聞いた。夢の中に居た僕はよろこんで兄上のこの言をそばで聞いていた。そして目が覚めて、更に嬉しく感じた。兄上は確かに天に居て、僕の現在を見給ひ、歎び居らるることを。

兄上、見給う、見給う。喜び給う、喜び給う。ああ、我、^{いか}争でこの信を棄てんや。兄上のため、それだけでさえ、この信仰は棄てられない。まして、我が靈魂の益々深く求むることとなるに於てをや。この宝、此の幸、以て何に換え得べき。

○1925年1月15日 (木)

晴。起床8時。今日は完全に遅刻である。8時30分に学校へ行つた。とうとう遅刻をした。朝食ぬきだったら、或は免れたかも知れない。試験勉強で休むやつが半分以上、驚く次第だ。間に合わなくても試験勉強のために休まぬ。もう、何にかにと言うまい。もつと自分が信仰に、基督者のになるまで自分のために。兄上からお葉書をいただく。母上御健全でなにより。これから試験で、日記も簡単になるだろうが、信望愛の生活は相変わらずであると思う。

“Fasset eure Seelen mit Geduld!”

〔耐え忍びて汝らの生命を全うせよ(ルカ21・19)〕

汝は高価なものを以て贖われたるものなり。絶大の価を以て贖われたるものなり。

○1925年1月16日 (金)

晴。グンデルト先生が言われた。単語がわからないと云つてすぐ独和の辞書をひく、こ



れはごくよろしくない。少なくとも先生の時間は全然辞書なし、日本語なしで、直感的に独逸語の心を知ってもらいたい。独文和訳にしろ、和文独訳にしろ、その一字一字について訳して行こうとしたら、いつまでたつても本当の翻訳は出来ない。語学は進歩しない。自己と和文の交換をよくなし、独文と自己との交際を親しくし、和文を独訳せんとするときは、和文をよく読み、その心をよく知り、しかして、自分の独文との平生の親交により、独文を以てその心をあらわさんとつとむるときに、初めて独文、真の独文、生きた独文が出来るという意味のことを云われた。故に、独逸語の時間は脳に独逸語のために一小室——それは何も他のものに入るをゆるさざる——を設けて、独逸語と親しむべきである。語学の勉強皆之なりと。文法をやったり、すぐ辞書にたよったりするのはよくないと。今日などは出席者、3分の1 (10数名) のみ。試験のために休むものである。来週は一フンバリを要する。しかし、一日の労は一日にて足れりである。かく云い給う主に信頼することの有難さよ。

○1925年1月17日 (土)

晴。出席者13名のみ。先生も張り合いなく、授業をなさざるあり。勉強に油ののるは今日よりなり。僕は、美食をこのむ性質ありと云う、お陶宮〔註・陶宮術は1834年に横山丸三が創始した開運のための修養法〕から云うと。然り、美食を好む。しかし、美食は昔から我が家にては与えず。外で食べることはごくごく稀なり。故に、外で食べることは自由な今でも殆どなし。否、1人で或は2、3人で食べに行くということは水戸へ来てまずなかりき。而して今は、理由を全然異にして、外で食べる「食いに行く」と云うことを好まず、学生ことに高等学校生、大学生のなすところならんことを好まず。神、我にその氣分をゆるし給わざればなり。美食それ何ぞ。我が身を害するものなり。我は、米の飯と味噌汁にて可なるものなり。イモより、豆より、あえて何を食わんと云わざるなり。神、之をよるこび給わざるなり。ことに肉食を好まず。魚もこの頃はさほど好まなくなれり。我が生物に対する心持ちのあればなり。

○1925年1月18日 (日)

晴。午前8時起床。聖日に試験勉強、誠に心ならざりしも、平常の怠慢、止むを得ずなさざるべからず。神にこのことを深くお赦しを乞う次第である。新しき学期より、我もまた政美兄上の如く、よくその日を歩みて試験近しいえども、聖日に勉強をなすまじく決心する。兄上よ、天の兄上よ、この現状をしばらくゆるし給え。終日、歴史の勉強をなす。

○1925年1月19日 (月)

晴。朝は非常に寒い。6時に起きた。問題が出た。心理は予期に反して易しかった様である。



歴史(西洋史)これはすっかりヒネラレタ。平常の不徹底な勉強法を完全にあばかれた。歴史の学び方について色々教えられるところあり。試験は青丸だろうが、有益な試験であった。否、歴史の勉強に限らぬ。心に大いに感ぜさせられるところがあった。歴史はことに統覧の能きが必要とする。第3学期は、猛烈に勉強してこの不名誉を挽回してやる。飽くまで、マイアーの原書で勉強して見せる。カンニングはいつでも絶えぬのはただ、今日の学生のために実に遺憾千万とするところである。

○1925年1月20日(火)

晴。我等は聖霊により信仰によりて希望を抱く。神よ、我と共に在まし給え。アーメン。静けき夕。

○1925年1月21日(水)

晴。今日は休み。この休みがないと、睡眠不足でつづきそうもないのである。試験沙漠の沃地である。

○1925年1月22日(木)

晴。兄上の御命日。試験は5課目。大変だ。しかしまず痛手はおわなかった様である。今度は幸に消耗しない。身体の丈夫になったこと、精神的にしっかりして来たことを自覚してありがたく感ずる。グンデルト先生、この頃大変、やさしくなられた様に思われる。長者が愛の心を以て対されるとき、人はそれに敬愛を以て対さざるを得なくなる。

「光あれと言ひ給ひければ光ありき」

「神は生気をその鼻に吹き入れ給えり」〔独文〕

は僕に課せられたる問題であった。創世記のこの答えが今日の僕の問題であったのは何だか嬉しい心地のするものであった。

○1925年1月23日(金)

晴。英語、独逸語の試験。“Hilys Essays”の方の試験(実吉教授)は、僕がとくにこの本が好きのため、よくやってあったから、すらすらと出来、応用も無事において、第一番に答案を出したのは心地よきことであった。他の独逸語を失敗したからその挽回をやったわけである。これからうんと独逸語の勉強をしてやる。残りは一日となった。長い試験である。自由な勉強の出来る来るべき日が待たれる。

ああ、不正なるものの世よ。不正のものをして不正をなさしめよ。我はキリストの国のものなり。世のものと何のかかわりかあらん。



○1925年1月24日(土)

晴。天気がよくつく。試験の最後の日が来た。1時間半で終った。睡眠時間毎日平均4、5時間で1週間ぶつつづけた。而もさほど疲れないし、消耗もしない。この健康体を与えられたことを深く感謝し奉る。神に従いて生きなば、益々御恵みの深からんことを信ず。午後から散歩した。常磐公園へ行った。寝ころんで天を仰いだ。深く深く、はてしなき天を仰いだ。その青紺の色はこの地上の何ものにもくらぶることの出来ぬ、淨き色であつた。「光あり」「淨潔あり」、ただその結晶そのものの色であつた。白雲が漂うていた。二群の白色が漂うていたが、しばし漂ううちに日の光に、あとかたもなく消え失せてしまった。碧空に吞まれてしまった。そして青また青、僕の大好きな青と光のみが僕の全視界であつた。身体を起こせば身はこの地上にあるを見、眼は俗世のものに向けられる。ああ自分はそのとき出来れば羽化して天上したく思つた。その辺を彷徨する、あわれむべき俗人青年男女を見るにしのびず、サツサと公園を去つた。ただ吐玉泉の泉水のみ僕の口を淨めてくれた。帰つて、夕飯後、入浴。7時就床。

○1925年1月25日(日)

晴。午前7時起床。正に12時間寝た。疲れも癒えた。春の様なうらかな日である。『旧約と新約』を読んだ。再び甦るの感がした。聖書は生命なりである。これなくしてついに我は生くる能わずである。

「キリスト我に在りて生けるなり、もはや我生くるにあらず」

である。或る人がやつて来た。色々のあわれむべき語を發していた。2、3名の友は色々の会話をしていた。彼は果たしてかくなれりと僕は感じた。そして、彼のあわれむべきを痛感した。ああ、あわれむべきは現代の青年なるか、学生なるか、高等学校生なるか。ああ、おそるべきは現代の青年なるか、学生なるか、高校生なるか。彼等は全く迷いと破滅の道を彷徨している。我は何としても彼等の友たることは出来ない。彼等と親しむことは出来ぬ。如何に難ぜられ、馬鹿にせらるるも、また誤解せらるるも、彼等はただあわれむべきものとしか我が眼には映じない。彼等の悔ゆる日、覚むる日は彼等の肉体の滅する日なるか。大困難に遭遇する日なるか。はた、亡きやも知れず、ただ滅亡のみなりやも知れず。おそろしき現代人、あわれむべき現代人。我等はその犠牲となると、神の栄光のために之を厭わず聖戦あるのみ。

来るべき年、与えらるべき多くの年のために、我、確く備えん。内村先生に恩あり、藤井先生に恩あり、亡兄に恩あり。今は黙して準備のために。

神の恵、基督者の愛、聖霊の交、願わくは我と偕にあらしめ給え。アーメン。



○1925年1月26日(月)

晴。汝等の荷をエホバにゆだねよ。さらば汝等をささえ給わん。我に味方あるなし、一人だになし。ただ我が主在ますのみ。然り、彼ありて、我は足れり。友よ、我何のかかわりあらん。我、汝等とはなれん。汝等は各強きが如し。各相交わり、相結べるが如し。しかれども、汝等は互いに離るる日を見ん。抛るべきところなきものとなり果てん。終りの日来らば、なげきとかなしみとあるのみ。我、汝等を愛す。愛するが故に、にくむ、かなしむ。ああ、わが悲しみや深し。友よ、高校生よ。我が汝等のために奉ぐる祈りを知らずや。汝等の罪は不敬、不遜より来る。我が願うところは汝等に敬虔の与えられんことのみ。その願いの聴かれん日は何日なるぞ。主なる神よ、いかなればかく罪人は目覚めざるぞ。我等を厳しく罰し給え。如何なる困苦もくだし給え。主よ、願ひ奉る。願わくは我を用ひ給いて、おそるべき現代青年の精神を救わしめ給え。我は主のために如何に現世に苦しむも喜びてこれを受くべし。

主にのみ十字架をおわせまつり、我知らず顔にあるべきかは。我もまた主に導かれて十字架の道を歩まんことをのみのぞむ。而して主の必ずこのために助け給わんことを我は知る。信ず。アーメン。

○1925年1月27日(火)

晴。励みて進め、日々の勉めに。

午後4時～5時、学校のこと。

午後6時～8時、英語及び独逸語。

午後8時～9時、聖書。

午後9時、祈祷。

午後9時～10時、宗教書、書簡、日記。

就床、10時半まで。

いとも幸なる身よ、汝は神に酔える人なり。かのクロムエルの如く、ルーテルの如く、雄々しき主の僕として人生を終えん。我が事はただこれのみ。日々の誘惑、この世の人の種々なる言語を聞きます毎に、かえって主の御言に聴かんと傾く心を与え給いますこと、誠に幸と存じます。水戸に孤独なるとき、かく強く守り給う主は、主の僕の友を得る日来らば更に幸に私を恵み給うと信じ、また友のあるべき日をぞ待つのでございます。

○1925年1月28日(水)

晴。

「我知る我を贖うものは活く。後の日に彼必ず地の上に立たん」(ヨブ19・25)

恵は大なり、受けよ、自らがすことなかれ。



「熱心に祈ると半ば以上、勉強が進む」ルーテル。彼の良心のインスピレーションをしてまた我が衷にも閃かせ給え。我もまたあくまで俗塵を去らんと欲するものなり。武田の叔母様に御手紙を差し上げた。僕の決心と益々信仰に、の意を申し上げた。そして、最後になぞの歌を書いた。

我に三つの花あり。 (母上) (高島伯母様) (武田の叔母様)

一つは揚げられて天にあり。

今星となりて輝く、希望の光なり。

二つの花は地にあり。

我が飲びわが慰めなり、我が愛切なり。

また一つの星あり、導きの光あり、真の光なり。 (兄上)

やがて彼の星も此の星も、かの花もこの花も

我もまた知らざる人々も

その日来らば、主の許に

永遠の歌を交さんこととて楽しけれ。

○1925年1月29日(木)

晴。宣ちゃんが桐寮を去る。勉強しに。僕達3人となる。僕は今学期もガンバラねばならぬ。八畳に一人となった。淋しいが勉強も出来る。贅沢すぎる位だ。日当たりはよい、広々している。

○1925年1月30日(金)

雪。起きて見ると、こは如何に、銀世界である。何だか昨夜は暖かいと思った。盛んに降っている。雪は午後3時頃まで降りつづいた。乾燥しきっていたこの頃とて、積もること積もること。雪景色はまた目の覚めるものである。雪が降ったら、道がぬかるだのなんだのと云わないで、その美を讚美し喜びながめるがよい。ものの善なる方、美なる方、明るき方を見るほど人は幸福である。不平のあるところに不平は積もる。

『若きルーテル』を少し読んだ。痛感することあり、励まされることあり。また、この書を読みたりし当時の兄上を思い浮かべて、^{うた}転た落涙、感謝せざるを得ず。夜、天、晴れ、群星、輝砂の如く、雪は蒼銀に光る。若きルーテルは、

「真の食欲もて、彼(ルーテル)は聖書を読み、後に至るまで常に聖書に噛み付いていたのである」

とある。義に飢え渴くもの彼の如くありたし。

「多くの黙示に因て我が^{たかぶ}傲ること無からん為に一つの刺を我が肉体に与えらる」(コリント後12・7)



これは今日の僕に適切に応ずる御言である。

○1925年1月31日 (土)

晴。晴天。太陽は、白皎々たる雪の上に光を投げて、四面はギラギラと別世界の如く、白銀に光る。青木の叔母様から、泰ちゃんの願書のおたのみが来た。早速出して送って上げた。義人は信仰に縁て生く。汝不信の愚に陥ること勿れ。今日もまた、北京の兄を憶うこと切にして、彼の死の完全を想って感謝せざるを得ず。

ともしびをともし

目をさましてまたん

主かどにきまさば

よろこびむかえて

親しく我主に つげ奉らまほし

「救をつけしは 御恩なりき」と。

の歌(180、愛歌)は正に兄上自身を証するものである。

彼、備え居れり。主召し給う。

彼、喜びて従えり。

誠にこれであつた。人生はこれで完うされる。

境遇は如何にもあれ、事業、地位、財産、名誉、如何にもあれ、我れは日々備う。これがクリスチャンの生活である、生命である。備うとはなんであるか。意味は深くある。そしてこれほど楽しい、信頼なことがあるうか。我もまた日々備えん。

『若きルーテル』を更に読み、孜孜と胸に迫る。かの兄上の青き鉛筆の跡の如何に懐かしきことよ。数年の昔の兄と、今この青線をとおして肝胆相照らして語る。如何に飲ばしきことよ。我が青線もまた加えられて、良書は益々我が友なり。